

ホツマツタエ本文

3アヤ(綾)1(1行)~2(2行)【本文】

ラシテ	カナ文字	現在訳
𑖀𑖂 ① 𑖃𑖄	𑖃 ① 𑖅 𑖆 𑖇 𑖈 𑖉	諸神の 高天に政
① ① 𑖊𑖋 𑖌	𑖍 ① 𑖎𑖏 𑖐 𑖑 𑖒	諮るのち ツワモノヌシが
𑖓 𑖔 ① 𑖕𑖖	𑖗 𑖘 𑖙 𑖚 𑖛 𑖜 𑖝	両神の 一姫三男お産む
𑖞 𑖟 𑖠 𑖡 𑖢	𑖣 𑖤 ① ① ① 𑖧	殿五つ 問えはカナサキ
𑖨 𑖩 𑖪 𑖫	𑖬 𑖭 𑖮	答ふるに

語句の解説

- ・高天→古代の政庁地区、・ツワモノヌシ→トヨケの四子、両神→イサナギ、イサナミ、
- ・一姫三男→イサナギ、イサナミの子で、ヒルコ、ワカヒト、モチネ、ハナキネのこと
- ・殿五つ→生まれた邸宅が五ヶ所

原文の現在訳

諸神の 高天に政 諮るのち ツワモノヌシが 両神の 一姫三男お産む 殿五つ 問えはカナサキ
答ふるに

【疑問】

- 1、「諸神の 高天に政 諮るのち」とのことですが、高天に出席した諸神の名前は、ツワモノヌシの一人ですが、他に出席していたカミ(神)はどなたでしょうか？
- 2、また、「高天に政」の高天はどこにあったのでしょうか？

【疑問に答える】

1、高天に出席した諸神の名前

大変難しい疑問になります。そもそも、ホツマツタエは、ある書記局がいて時系列の出来事をまとめたものでないようです。ホツマツタエ40アヤ(綾)を読む前にも記載しましたが、「2~5アヤ(綾)の文頭は、明らかに「神議り」の場面です。ここに記述されたトミ(臣)名が、恐らく諸神になるかと思えます。また、25鈴頃に「神議り」されておりますので、この頃に記述されているトミ(臣)も対象かと思えます。

下記にアヤ(綾)毎のカミ(神)を整理し表にして見ました。抜粋しますと、タカギ(八十杵の子、豊受の孫)、ツワモノヌシ(豊受の子、春日殿)、カナサキ(住吉神)、クシキネヒコ(ソサノオの子、大己貴)、オオヤマスミ(谷の桜内)、アチヒコ(思兼)などが高天に出席した諸神と考えられます。後に、タケミカヅチ(鹿島神)、フツヌシ(香取神)、ワカヒコ(天児屋根)も出席したと推定されます。

諸神と推定されるアヤ(綾)毎とトミ(臣)名

場面	アヤ(綾)	トミ(臣)名	トミ(臣)名	トミ(臣)名
【アヤ(綾)請えば】	2アヤ(綾)	タカギ		
【諮る】	3アヤ(綾)	ツワモノヌシ	カナサキ	
【カミ(神)議りなす】	4アヤ(綾)	クシキネ	オオヤマスミ	
【カミ(神)議りして】	5アヤ(綾)	クシキネ	アチヒコ、オモイカネ	
【25鈴100枝28穂】		タケミカツチ	フツヌシ	ワカヒコ

2、高天の所在地について、ホツマツタエを読みますと、次のように変遷しているようです。

(1)国常立の頃～アマテル神が就任する頃までは、「日高見の 高天(注1)に祭る(2アヤ22)」より、日高見に高天があったことが読めます。

【ミカサフミの記述】

(注1)タカマとは、

ユキの宮 アメトコタチと スキ殿に ウマシアシガイ ヒコチ神 併せ祭れば 名もタカマ

タカマ(高天)成るアヤ(綾)

ヤマクイの タカマ(高天)を請えば

草薙ぎて 九星を祭る → 九星……(1)天元神+(2)八元神

ユキの宮 天常立と → 天常立……九星の神のこと

スキ殿に ウマシアシガイ

ヒコチ神 併せ祭れば (1)天元神…天御祖神(ア)+天御中主(ウ)+国常立(ワ)

名もタカマ 諸 集まりて (2) 八元神…トホカミエヒタメ(8人のクニサツチ)

(2)アマテル神が日高見より新宮に遷られてから都を伊雑宮に遷されるまでは、「日のヤマト 新宮造り 天御子は 日高見よりぞ 遷ります(6アヤ1)」の文章、また、「君は都お 遷すさんと オモイカネして 造らしむ 成りて伊雑に 宮遷し(6アヤ23~24)」の文章より、ハラミ山の新宮に高天があったことが推定されます。

(3)そして、伊雑宮にあった高天が、日高見の国府でヲシホミミに天つ日嗣きされるまでは、そのまま伊雑宮にあったと推定されます。

(4)その後、「アマテル皇子の ヲシホミミ 天つ日嗣き 多賀の国府(12アヤ2)」の文章より、高天が日高見に遷っており、このことが、「日高見に 告ぐれば君も 喜びて ケフ(羽毛)のホソヌ(細布)の織らしむる 高天の原の 仮宮に 帯賜れば 諸神が名も 常陸の宮と(16アヤ86~87)」の文章より裏付けられるようです。

(5)その高天も、多賀の国府にあった高天より、オシヒトが伊勢に降りられた以降は、高天が伊勢に遷ったことが、「皇子オシヒトに 譲りまし 天より伊勢に 降りいます(19アヤB1)」の文章より推定されます。

そこで、前述の説明と重複しますが、もう一度、高天の場所が変遷したと推定される場所を簡条書に整理しますと、日高見→ハラミ山→伊雑宮→多賀の国府→伊勢になるかと思います。そして、3アヤ(綾)の記述の「諸神の 高天に政 諮るのち」の高天はどこにあったかです。先にも述べましたが、3アヤ(綾)は、9アヤ(綾)(紀元前290年)以降に記述されていると推定されることです。そこで、ホツマツタエを具に見ますと、9、10、11アヤ(綾)の高天は伊雑宮のことになるようです。次の12アヤ(綾)～18アヤ(綾)までは、多賀の国府が高天であったかと推定されます。だが、この場合の3アヤ(綾)での高天の場所は、2アヤ(綾)に引き続き、伊雑宮の高天であったろうと思います。

解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

アマテル神が居られます伊雑宮に諸神の皆が集まりました。その高天にはアマテル神、カナサキなどの重鎮が政を行い、重要事項に関しては全員に諮ることをされました。その会議が一段落したのちに、ツフモノヌシ(春日殿、天児屋根の父)が、日頃より疑問であった両神の皇子の数と殿の数の違いについて質問しました。両神は一姫三男お産むことの4名ですが、殿(産屋、産まれた館)は五つです。その皇子と殿の数が違うのは、どのような理由があるのですかと問えば、カナサキの翁が、答ふるに(答えられるには)

3アヤ(綾)2(2行)～4(1行) 【本文】

ヲシテ	カナ文字	現在訳
牟①开△𠄎①𠄎	ムカシフタカミ	昔両神
牟△④𠄎𠄎	ツクバニテ	筑波にて
𠄎①𠄎𠄎の	メカミニハ	女神には
𠄎𠄎𠄎④𠄎	メモトアリ	女元あり
④𠄎△𠄎𠄎	アマルモノ	余る物
△𠄎𠄎𠄎𠄎	ウマントテ	生まんとて
𠄎开𠄎𠄎𠄎	ナシテコオ	為して子お
𠄎の𠄎△𠄎	ナハヒルコ	名はヒルコ

語句の解説

- ・筑波→茨城県の筑波こと、
- ・メモト→女元→陰元、
- ・ミトノマクバヒ→媾合→性交、
- ・ヒルコ→イサナギの初子

原文の現在訳

昔両神 筑波にて 御巡り問えは 女神には 成りなり足らぬ 女元あり 男神の成りて 余る物 合せて御子お 生まんとて 媾合(コウゴウ) 為して子お 妊みて生める 名はヒルコ

【疑問】

3アヤ(綾)2(2行)の本文に、「昔両神 筑波にて 御巡り問えは」との文章があります。その「筑波にて 御巡り問えは」とは、どのような意味になるのでしょうか。また、「御巡り」に関係する文章として、3アヤ(綾)6(2行)～7(1行)に、「八尋の殿に 立つ柱 巡り生まんと」の文章がありますが、イサナギ、イザナミは子作りされる時に、なぜ、「立つ柱(を) 巡り」されたのでしょうか。巡りされる必然性があるのでしょうか。

3アヤ(綾)2(2行)

昔両神

筑波にて 御巡り問えは

女神には 成りなり足らぬ

女元あり 男神の成りて

3アヤ(綾)6(2行)～7(1行)

オノコロの 八尋の殿に

立つ柱 巡り生まんと

言挙げに 女は左より

男は右に 分かれ巡りて

【疑問に答える】

赤文字:ヲシテの現在文を示す。 青文字:訳文を示す。

メグ(巡)りの目的・真意が不明

先ず、「巡り」の言葉をホツマツタエより、「メグリ」「メクリ」の項目で検索して見ました。該当するヒット件数は81件でした。意味は、「物のまわりをめぐること。順に従ってまわること。」になります。この「めぐる」「まわる」の意味を、「昔両神 筑波にて 御巡り問えは (3アヤ(綾)2(2行))」に当て嵌めて、訳文を考えて見ました。「昔、イサナギ、イサナミの両神は、筑波にて あちこちを巡り(めぐる、まわる)された後、女神のこゝと、男神のこゝを問えは(れました。)」となるが、御巡り(まわる、めぐる)される目的が不明のようです。

更に、「オノコロの 八尋の殿に 立つ柱 巡り生まんと (3アヤ(綾)6(2行)～7(1行))」についても、同じように訳文を考えて見ました。すると、「オノコロ(天御祖神の心)のこもった八尋の殿には、土間の中央に大きな柱があり、その柱は天御祖神の心をお祭りするための立つ柱でした。イサナミの後は、その立つ柱を巡り(まわる、めぐる)され皇子(女)を生まんと」となるようです。だが、この訳も立つ柱を巡られる真意が不明のままのようです。

もう一つ意味、運(メグ)りは百度参りの原形か

そこで、立つ柱を巡りされる目的、真意が掴めないため、更に、ホツマツタエを検索して見ました。すると、27アヤ(綾)24の「メクリヒラケル」の文章を見逃しておりました。注意深く見ますと、「メクリヒラケル」の「メクリ」には、「運(メグ)り」の言葉を当て嵌めことができるようです。意味は「定まったとおりにめぐり行く」、「めぐりあわせ。(運勢・運命)の意味も含まれているようです。このことより「メクリヒラケル」の訳文は、「運(メグ)り開ける」→「運命が開ける」と訳できるようです。このように考えて来ますと、「運(メグ)り開ける」の意味は、近代で云う所の「神社などに百度参り」する言葉と思え、ホツマツタエの「運(メグ)り開ける」が、「百度参り」の原形と思えて来ました。

3アヤ(綾)2(2行) 本文

「昔両神 筑波にて 御巡り問えは」

訳文

「昔、イサナギ、イザナミの両神は、筑波山にて 良い世嗣が生まれることを願われて、運(メグ)りされ、後に、女神のこと、男神のことについて問えは(れました。)

3アヤ(綾)6(2行)~7(1行) 本文

「オノコロの 八尋の殿に 立つ柱 巡り生まん」と

訳文

「オノコロ(天御祖神の心)のこもった八尋の殿には、土間の中央に大きな柱があり、その柱は天御祖神の心をお祭りするための立つ柱でした。イサナミの後はその立つ柱の外周を運(メグ)り願われ、このことで、天上の運が開けて日の神の皇子を生まんと 言挙げに」されたのでした。

メグリの真意

このように、同じメグリ、メクリであっても、メグリ、メクリとするための必然性があり、「立つ柱 巡り生まん」の本意は、運(メグ)り(1件)であったようです。だが、巡りに慣れた現代人は、ホツマツタエの中に81件の巡りがあるため、私も含めて気付かない人が多いように思います。今回、同じ巡りを当て嵌めて訳文した場合、「筑波にて 御巡り問えは」と「立つ柱 巡り生まん」の行間の意味が共通の訳ができないのです。そのため、「疑問」に取り上げた研究した結果、意外にも真意が見えて来たようです。

解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

昔、イサナギ、イザナミの両神は、筑波山にて 良い世嗣が生まれることを願われて、運(メグ)りされ、後に、女神のこと、男神のことについてお互いに問えは(問われました。) イザナミが答えられるには、女の神々の体には男神と比べますと成りなり足らぬ女の元(ほと、女陰)があります。また、イサナギが答えられるには、男の神々の体には女神と比べますと成りて余る物(男根)がありますと述べられ、お互いの男女の体の秘密を述べ合われました。そして両神はお互いの秘密を確認されるやお互いの体を合せて御子お生まん(生もう)とて(とって)、性交、媾合の古語であるミ トノマクバヒを為(されま)して、イザナミの女神は(皇)子お妊みて、268日目頃に皇女をお生みにめる(なりました。) お生まれになったその皇女の名はヒルコと申されました。

3アヤ(綾)4(1行)~5(1行) 【本文】

ヲシテ	カナ文字	現在訳
开①夷单 𠄎𠄎の	シカレトチチハ	然れと父は
☆☆虫母爪 ④④の 𠄎𠄎𠄎𠄎	スズヨソホ	母は三十一穂
◎𠄎田△开 𠄎单夷の◎𠄎𠄎	アメ ノフシ	天の節
𠄎𠄎田 𠄎𠄎𠄎	チチノオエ	父の汚穢
△𠄎单田𠄎	クマトナル	隈となる

語句の解説

・ヒルコ→イサナギの初子、・天の節→厄年、・オエ→汚穢→穢れて、・隈→奥まった所、もののすみ

原文の現在訳

然れと父は スズ四十穂 母は三十一穂 天の節 宿れは当たる 父の汚穢 男の子は母の 隈となる

【疑問】

「然れと父は スズ四十穂 母は三十一穂 天の節」の文章のスズ40穂と31穂は、イサナギとイサナミの年齢のように思われますが、他に、スス暦の御世のアマカミ(天神)、アマキミ(天君)の年齢についての記述はあるでしょうか。その時の年齢は、太陽暦の1年365日で計算されているでしょうか。

【疑問に答える】

ホツマツタエを見ますと序~28アヤ(綾)65が、スス暦の御世になります。このススの御世の範囲における年齢の記述は、残念ながら僅か1件のみです。その1件の記述は、スズ40穂と同等な表記の「スス〇〇年」の記述でなく、「歳15なれば」と表記されております。注目することは、「スス」の表記でなく、「歳」の表記と云うことです。この違いは、年齢を見る尺度が、大きく変わっていることが推定されます。

また、見方を変えてイサナギの年齢の「スズ四十穂」の「十穂」のみを取り上げて、序~28アヤ(綾)65までを検索して見ますと、「100枝11穂に」、「100枝28穂」、「16枝41穂」、「16穂居ますも」、「17枝23穂」、「23穂ツウエ」の6個がフィットするようです。この6個を分析しますと、「16穂居ますも」は、一日の長さを表すもののようです。

そして、他の5件は一日の長さより、更に長い単位の古代暦の表示のようです。いずれにしても、太陽暦の1年365日の表記ではないようです。このように調査して来ますと1年の日数が不明である時に、1年の日数が判明しているかのような年齢の文章「然れと父は スズ四十穂 母は三十一穂 天の節」が記述されていることです。

更に、次の文章でも、「天の節 宿れは当たる 父の汚穢」のように、恰も、1年の日数がわかっているような記述になっていることです。

結論になりますが、上記のように、3アヤ(綾)4(1行)～5(1行)を分析調査しますと、「スズ40穂」、「31穂」および、「歳15」のそれぞれの年齢は、近代の暦法より判断しますと、判断基準が未記載であり、また解読できる記述も見出せないようです。

そのことを裏付けるように、イサナギ、イサナギの年齢の「スズ40穂」、「31穂」は、現在の人間の年齢と大差ない年齢の記述と思われませんが、それでもそれ以降に、スス暦の御世に登場する人たちの年齢は未記述になっております。その未記述の人たちも、イサナギ、イサナギの二人の皇子(女)であるヒルコ姫、ワカヒト、モチキネ、ワカヒトであり、当然、年齢が当然わかる範囲の人たちですら年齢が未記述なのです。

更に、その後の多くのアマカミ(天神)、アマキミ(天君)の年齢ですら、ホツマツタエには年齢が未記述なのです。そして、やっと、タケヒトの御世になり、「スス〇〇」の表記でなく、「歳15なれば」として記述になります。

更に、年齢の表記と誤認し易いですが、ワカヒト(アマテル神)の記述に「苦きお食みて 百七十三万二千五百年お 永らえて」があります。それも、現在人の年齢とはかけ離れた記述になっており年齢とは認められないようです。その根拠として、現に、ホツマツタエの文中よりワカヒト(アマテル神)の年齢を推定しますと、ワカヒト(アマテル神)の生涯年齢は82～85歳と推定されるからです。

以上のことより、イサナギ、イサナギの年齢の「スズ40穂」、「31穂」の部分は、現時点では「神話」に見られても吝かでないようです。但し、重複しますが「100枝11穂に」、「100枝28穂」、「16枝41穂」、「16穂居ますも」、「17枝23穂」、「23穂ツウエ」のような、鈴、枝、穂の記述は、私の研究において、近代暦法への換算が可能であることを確認しております。

解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

然れと(しかしながら)世の期待と裏腹に父の歳はすでにスズの歳の四十穂になっておりました。また母の歳は三十一穂になっておりました。そして、折しも父母の年齢は天の節(厄年)に遭遇されており、この年に子種を宿れはわが子に災難が当たると云われており、その父の厄の汚穢は女の子に、男の子は母の汚穢の隈となると云われておりました。

3アヤ(綾)5(1行)~6(2行) 【本文】

ラシテ	カナ文字	現在訳
𠩺𠩺𠩺凡𠩺𠩺𠩺	ミトセイツクニ	三歳慈しに
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺 凡𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	タラザレド イワクスフネニ	足らざれど 磐楠船に
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺 𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	ノセスツル オキナヒロタ	乗せ捨つる 翁拾たと
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺 𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	ニシトノニ ヒタセハノチニ	西殿に 養せは後に
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺 𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	フタハシラ ウキハシニエル	二柱 浮橋に得る
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺 𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	オノコロノ ヤヒロトノニ	オノコロの 八尋の殿に

語句の解説

- ・磐楠船→楠を割り抜いた船、・翁→カナサキの翁のこと、・西殿→邸宅の西側にある住い、
- ・浮橋→現在の仲人のこと、・オノコロ→天御祖神の心

原文の現在訳

三歳慈しに 足らざれど 磐楠船に 乗せ捨つる 翁拾たと 西殿に 養せは後に 二柱
浮橋に得る オノコロの 八尋の殿に

【疑問】

「(ヒルコ姫を) 三歳慈しに 足らざれど 磐楠船に 乗せ捨つる (カナサキの)翁拾たと 西殿に 養せは後に 二柱 浮橋に得る」の文章について、ご質問します。

両神(イサナギ、イサナミ)は結婚され、ヒルコ姫が三歳になる頃、「磐楠船で捨てられる」行事をされた理解しておりますが、その「後に 二柱 浮橋に得る」の文章が記述されておりますが、この「二柱 浮橋に得る」とは、どんな意味でしょうか。

【疑問に答える】

文章を分けて考えますと、まず、「二柱」の意味ですが、デジタル大辞泉で「二柱」の解説を見ますと、「伊勢の二柱」の解説が記載されており、「伊勢神宮にまつられている内宮(ないく)の天照大神(あまてらすおおみかみ)と外宮(げく)の豊受大神(とようけのおおかみ)の二神。」と記載されております。また、「二神」の意味を同様に辞書の解説を見ますと、「2柱の神。特に、伊弉諾(いざなぎ)・伊弉冉(いざなみ)の神のこと。」と記載しておりました。そうしますと、3アヤ(綾)5(1行)~6(1行)の文章の「二柱」とは、ヒルコ姫の両親である「イサナギ、イサナミを指している」と思われます。だが、イサナギ、イサナミは結婚されてヒルコ姫が生まれているため、フタカミ(両神)と記述されても良いと思われそうですが、なぜか、「二柱」の記述になっております。

次に、「浮橋」の意味ですが、2アヤ(綾)25(2行)~26(3行)より引用すると、「浮橋を渡す人(仲人)」と容易に訳ができそうです。また、「得る」の大辞林辞書の意味は、「自分のものとする。手に入れ

る。」と記載しております。そうしますと、「後に 二柱 浮橋に得る」の意味は、「イサナギ、イサナミは、浮橋に渡す人(仲人)を自分のものとする。手に入れる。」となるようです。だが、日本語の訳としては、不自然な訳のようです。このように今まで、イサナギ、イサナミはヒルコ姫が生まれているため、「養せは、後に 二柱 浮橋に得る」の文章は、結婚後の文章として検討してきましたが、「二柱」と「浮橋」の文章に含まれる意味は、結婚後以外に他のことが考えられようです。

そこでもう一度、「二柱」と「浮橋」の関係を考察しますと、二柱は別々の人間とも考えられます。また、浮橋は従来の解釈より仲人とします。このように考えて来ますと、ヒルコ姫が生まれ→三歳→磐楠船→カナサキ翁→ヒルコ姫を養育された期間には、イサナギ、イサナミの二人は未だ正式に結婚してなかったことが想定されます。このことから、イサナギ、イサナミが結婚してなければ、結婚するための仲人、浮橋も必要でしょう。また、結婚してなければフタカミ(両神)の記述も必要ないと思われ、未婚の個々の神であれば、二柱と表現しても問題ないと思われれます。

以上、まわりくどい検討をしましたが、改めて3アヤ(綾)の1(1行)～6(1行)の文章を吟味しますと、1(1行)～5(4行)までは、イサナギ、イサナミはまだ、正式な結構をしてなかったことになり、結婚するを意味する「嫁ぎ」の文章もありませんでした。そして、6(1行)の「二柱 浮橋に得る」の文章によって、「イサナギ、イサナミは、正式に結婚された」とする解釈が成り立つ記述と判断されました。

2アヤ(綾)25(2行)～26(3行)より引用すると、

	タカミムスピの	
五代カミ	イミナタマキネ	
トヨウケの	姫のイサコと	
浮橋お	ハヤタマノオが	浮橋→浮橋を渡す人(仲人)
渡しても	解けぬ趣き	
解き結ぶ	コトサカノオぞ	

解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

だが、天の節の厄払いの行事に望むヒルコ姫は僅か**三歳**です。両神(イサナギ、イサナミ)がヒルコ姫に与えられる**慈しに**(慈愛:我が子を愛するようないつくしみの気持ち。)の深さはまだまだ**足らざれど**(足りませんが)、「**磐楠船に 乗せ捨つる**」の厄払いの行事が行われ、川に磐楠船を流されました。下流で待っていたカナサキに拾われたヒルコ姫は、**翁**の娘として**拾た**と育つこととなります。カナサキの邸宅の**西殿**は、ヒルコ姫が幼い頃を過ごす**屋形**になります。帰りを待っていたカナサキの妻は、ヒルコ姫を抱き上げて **優しく乳を上げられた**。ヒルコ姫は、カナサキの妻の乳を得て、気分も優れてあうわやと喜ばれて、手ふちされたり、目をしほの目にされて悦ばれるなど、ヒルコ姫を**養せは**(養育されました。)、そして、**後に**イサナギ、イサナミの**二柱**は、**浮橋**(仲人)**に得る**ことをされて、正式に結婚された場所は、**オノコロ**(天御祖神の心)の**こもった八尋の殿**になりました。

3アヤ(綾)6(3行)~8(4行) 【本文】

ヲシテ	カナ文字	現在訳
𠄎𠄎𠄎𠄎	タツハシラ	立つ柱
𠄎𠄎𠄎𠄎	メグリウマント	巡り生まんと
𠄎𠄎𠄎𠄎	コトアゲニ	言挙げに
𠄎𠄎𠄎𠄎	メハヒタリヨリ	女は左より
𠄎𠄎𠄎𠄎	オハミギニ	男は右に
𠄎𠄎𠄎𠄎	ワカレメクリテ	分かれ巡りて
𠄎𠄎𠄎𠄎	アフトキニ	合う時に
𠄎𠄎𠄎𠄎	メハアナニエヤ	女はあなにえや
𠄎𠄎𠄎𠄎	エヲトコト	糸男子と
𠄎𠄎𠄎𠄎	オハワナウレシ	男はわな嬉し
𠄎𠄎𠄎𠄎	エオトメト	糸乙女と
𠄎𠄎𠄎𠄎	ウタヒハラメド	歌ひ妊めど
𠄎𠄎𠄎𠄎	ツキミテス	月満てす
𠄎𠄎𠄎𠄎	エナヤフレウム	胞衣破れ生む
𠄎𠄎𠄎𠄎	ヒヨルコノ	ヒヨル子の
𠄎𠄎𠄎𠄎	アハトナガルル	泡と流るる
𠄎𠄎𠄎𠄎	コレモマタ	これも又
𠄎𠄎𠄎𠄎	コノカズアラス	子の数ならず
𠄎𠄎𠄎𠄎	アシフネニ	葦舟に
𠄎𠄎𠄎𠄎	ナガスアハチヤ	流す泡路や

語句の解説

- ・八尋の殿→広大な殿舎、・言挙げ→言葉に出して言い立てること、・あなにえや→まあ、すばらしい
- ・わな→念を押す気持の強い表現、・胞衣→胎児を覆う膜や胎盤等、・ヒヨル子→流産した子、水子
- ・葦舟→葦を編んで作った舟

原文の現在訳

立つ柱 巡り生まんと 言挙げに 女は左より 男は右に 分かれ巡りて 合う時に 女はあなにえや
 糸男子と 男はわな嬉し 糸乙女と 歌ひ妊めど 月満てす 胞衣破れ生む ヒヨル子の 泡と流るる
 これも又 子の数ならず 葦舟に 流す泡路や

【疑問】

「流すアワチ」のアワチとは、どのような意味になるでしょうか？

【疑問に答える】

アワチと聞きますと、兵庫県に淡路島がありますので淡路と思いがちです。それも仕方ありません。現在、兵庫県淡路市多賀に伊弉諾神宮が鎮座していることから、一般的には淡路と思いがちです。だが、3アヤ(綾)のイザナミは御子を「歌ひ妊めど 月満てす 胞衣破れ生む ヒヨル子の 泡と流るる」の文章を知っておれば、「葦舟に 流すアハチや」のアハチは、「泡と流るる」の掛詞であり、「泡路」と解釈の方が妥当と思われます。

原文の現在訳

ある状 天に告ぐるは フトマニお 味はえ曰く 五四の歌 事お結ばず 言挙げも 女は先立てず
嫁ぎとは 雌の鶴鴒 尾揺れ鳴く 雄鳥鳴き去る 又ある日雄鳥装ふ 雌が知りて 相交はれは 天よ
りぞ 鳥に告げしむ 嫁き法

【疑問_1】

「アルカタチ(ある状)」とは、何を指しているのでしょうか？

【疑問に答える_1】

大辞林の辞書を引きますと、かたち(状)とは、一部に「実際のありさま。すがた・かたちや、なりゆき。」と記載されております。そうしますと、ある状とは、「ある実際のありさま。あるすがた・あるかたちや、あるなりゆき。」に解説できると思われます。この解説を踏まえて、「ある状」を含む文章をホツマツタエより抜粋しますと、下記の5件が発見されます。そこで、この5件の文章の「ある状」の解説を考え、「ある実際のありさま」と同じ意味になるような語句を考えて、また、前文との重複を避けるため、「先に説明した内容」、「先にご報告した内容」、「前述した内容」の文章にも置き換えても問題ないようです。

1アヤ(綾)16

はべる時 紀志井の稲田 ホオ虫に 傷むお嘆き ある状(ある実際のありさまを) 告ぐる伊雑の
大御神 天の真名井に

3アヤ(綾)8(3行)~9(2行)

これも又 子の数ならず 葦舟に 流す泡路や ある状(前述した内容を) 天に告ぐるは フトマニお
味はえ曰く

4アヤ(綾)41

手車お 作りカツラ(葛城)の 迎ひとて ハラミに伝ふ ある状(先に説明した内容は) 両神夢の
心地にて 相見給えは

25アヤ(綾)30

望み見て 八重の畳お 敷き設け 引き入れまして 故お問ふ 君ある状(あるすがたを) 宣えは
ハデ神しばし

40アヤ(綾)92

奉る 君楽しみ の 神楽獅子 八万鹿島に ある状(ある実際のありさまに) 障り無かれと 遊ぶ サ
ルタの神の

【疑問_2】

「トツキ」の意味を教えてください。

私なりに、3アヤ(綾)10(1行)～11(2行)の文章「トツキトハ メノニハナブリ オユレナク オトリナキサル マタアルヒ オトリヨソオフ メガシリテ アヒマシハレハ アメヨリゾ トリニツケシム トツキノリ」を下記のように現在文に訳して見ました。その際、「トツキ」を現在文の辞書より「嫁ぎ」と訳しましたが、次の文章からは、なぜか、鳥の「セキレイ」を用いて嫁ぎ法を説明されております。また、漢字の「嫁ぎ」の解説を見ますと、「①他家へとつぐこと。②男女が交わること。」となっております。そこで、3アヤ(綾)10(1行)～11(2行)の文章の中の「相交はれは」と、辞書の「②男女が交わること。」の解説は共通しますが、「トツキ」にはもっと本質的な解釈が隠れているかと思えます。そこで、ホツマツタエより専門的に「トツキ」を解説して下さい。

3アヤ(綾)10(1行)～11(2行)の現在文

嫁ぎとは 雌の鶺鴒 尾揺れ鳴く 雄鳥鳴き去る 又ある日 雄鳥装ふ 雌が知りて
相交はれは 天よりぞ 鳥に告げしむ 嫁き法

【疑問に答える_2】

1) トツキ(ギ)に関する安聰本ホツマツタエのヲシテ記述体裁とフリカナ

ホツマツタエ全文を検索しますと、ヲシテで記述された(1)「トツキ」、(2)「トツギ」を合わせて17件あります。その中の(1)「キ」と(2)「ギ」の内訳ですが、ヲシテの記述体裁の(1)「キ」が8件、ヲシテの記述体裁の(2)「ギ」が8件、ヲシテの記述体裁の(3)未記述が1件になります。これに対し、ヲシテの記述体裁の(1)「キ」の8件のフリカナの内訳は、(1)①「キが3件」、(1)②「ギが5件」になります。また、ヲシテの記述体裁の(2)「ギ」の8件のフリカナの内訳は、(2)①「キが1件」、(2)②「ギが7件」になります。他の1件は、22アヤ(綾)全文がカナ文字のため、フリカナの(3)①「ギが1件」になります。詳細は、下表をご覧ください。

トツキ、トツギの記述とフリカナ表 (注2)表中の()、○内のNO、は、文中のNO、を示す

		フリカナの「キ」	フリカナの「ギ」	記述
内容	記述	件数	件数	件数
ヲシテの体裁	(1)「キ」	① 3件	② 5件	8件
同上	(2)「ギ」	① 1件	② 7件	8件
同上	(3) 未記述	—	① 1件	1件

2) トツキ(ギ)の解説

「トツキ(ギ)」の記述は先に述べたように17件になりますが、全件の解説は紙面上に無理がありますので、表中の(1)～(3)項毎にホツマツタエより1～2、3件を抜粋し、下記に例題文を掲載しました。そして、各々「トツキ(ギ)」についての意味を考えて見ました。この結果を見ますと、「トツキ(ギ)」の意味は、3種類あることがわかって来ます。一つ目は、トツキ(ギ)→十月、十ヶ月目を表す「トツキ」。二つ

目は、トツキ(ギ)→トの国を引き継ぐ「トツキ」。三つ目は、トツキ(ギ)→お嫁になる「トツキ」です。

例題文

(1)① ラシテの記述体裁「キ」、ラシテのフリカナ「キ」 【2件】

・本件は、「キ」と「キ」の組み合わせの「トツキ」です、前後の文章の妊娠、九月、十二月より月名の「十月」に解説されます。

4アヤ(綾)23

トコミキハ	クニウムミチノ	床酒は	国生む道の
オシエゾト	カクマシワリテ	教ふぞと	かく交わりて
ハラメトモ	トツキニウマズ	妊娠とも	トツキ(十月)に生まず
トシツキオ	フレトモヤハリ	年月お	経れともやはり

16アヤ(綾)29～30

ラシテナリ	チチハハアネオ	ラシテナリ	父母お
ハニアミテ	ツラナルミヤビ	地に編みて	連なる情び
テテタダヨ	チギリシタシム	テテタダよ	契り親しむ
トカカゾ	コツキミメコエ	父母ぞ	九月眉目声
ソナワリテ	トツキクライシ	備わりて	トツキ(十月)座居し
ソフツキハ	ツキミチウマル	十二月は	月満ち生まれる
ミタネコレナリ		御種これなり	

(1)② ラシテの記述体裁「キ」、ラシテのフリカナ「ギ」 【2件】

・「キ」と「ギ」の組み合わせの「トツキ」です。3アヤ(綾)10の「トツキ」は「疑問_2」に提案したものです。

4アヤ(綾)22の「トツキ」は、宿る子種より子供が生まれる十月の「十月」となるようです。

3アヤ(綾)10

トツキトハ	メノニハナブリ	トツキ(疑問_2)とは	雌の鶺鴒
オユレナク	オトリナキサル	尾揺れ鳴く	雄鳥鳴き去る
マタアルヒ	オトリヨソオフ	又ある日	雄鳥装ふ
メガシリテ	アヒマシハレハ	雌が知りて	相交はれは

4アヤ(綾)22

シタツユオ	スエバタガヒニ	下露お	吸えばお互いに
ウチトケテ	タマシモカワノ	打ち解けて	玉門川の
ウチミヤニ	ヤトルコタネノ	内宮に	宿る子種の
トツキノリコオトノフル		トツキ(十月)法	子お整ふる

(2)① ラシテの記述体裁「ギ」、ラシテのフリカナ「キ」 【1件】

・本件は、(浮)橋(意味:仲人を)を得てより、嫁になる「嫁ぎ」の解説で間違いないようです。

13アヤ(綾)11~12

アニナレド	ヤメルカオヤニ	兄なれど	病めるか親に
カナワヌハ	オトニツガセテ	叶わぬは	弟に継がせて
アコトナセ	ヨオツクモノハ	嫡子となせ	代お継ぐ者は
ユツリウケ	ハシエテトツギ	譲り受け	(浮)橋得てトツギ(嫁ぎ)
ムツマシク	コオウミノダテ	睦ましく	子お生み育て
マタユヅル		また譲る	

(2)② ラシテの記述体裁「ギ」、ラシテのフリカナ「ギ」 【3件】

・次は、「ギ」と「キ」の組み合わせの3件です。1件目の「トツキ」は、トの国を継ぐ「ト継ぎ」。2建目は、再び「トツキ」より嫁になる「嫁ぎ」で問題ないでしょう。3件目ですが、「イモオセ(婦夫)」はすでに夫婦の意味ですので、嫁ぐ必要がなく、トツギ(十月)生むが正解です。

2アヤ(綾)1

コトキニ	ミコオシヒノ	この時に	皇子オシヒの
トツギマエ	タカギガミキノ	トツギ(ト継ぎ)前	タカギ神の
アヤコエハ	カミノラシエハ	アヤ(綾)請えは	神の教糸は

13アヤ(綾)22~23

クラムスビ	トメテシカル	クラムスビ	留めて叱る
ワガコノミ	ニステノツラオ	わが子の身	煮捨ての面お
ミガカセト	オヤノラシエニ	磨かせと	親の教えに
オキツヒコ	フタタビトツギ	オキツヒコ	再びトツギ(嫁ぎ)
ムツマシク	キモセノミチオ	睦ましく	妹夫の道お
マモリツツ	モロクニメクリ	守りつつ	諸国巡り
ヨオラブル		世お終ぶる	

16アヤ(綾)15

ミツハニノ	キツマシワリテ	水、埴の	五つ交わりて
ヒトナル	ノチハイモオセ	人と成る	後は婦夫
トツギウム	オハハニムカヒ	トツギ(十月)生む	男は地に向かひ
トツグトキカリノシジナミ		トツグ時	カリのシジナミ

(3)① ラシテの記述体裁「一」、ラシテのフリカナ「ギ」 【1件】

・本件は、ラシテで記述されていない22アヤ(綾)になります。この「トツギ」は、嫁いで歳徳神を生んだと訳するのが妥当だろうと思われます。

22アヤ(綾)7～8

ヒサカタノ	アマテルカミノ	久方の	天照る神の
ハツミヨニ	ヒヨミノトリノ	初御代に	日読の鶏の
カオツグル	キツオカナネノ	光お告ぐる	東西おカナネの
トツギシテ	トシノリカミノ	トツギ(嫁ぎ)して	歳徳神の
アレマセル	ソノソヒカミオ	生ませる	その十一神お
エトモリト	アミヤシナウ	エト守と	アミヤシナウて
ヤミコナル		八御子なる	

3)「疑問_2」で質問した「トツキ」の意味を、鳥を用いた比喻で解説していた

「トツキ」の意味を考えるに当たって、3アヤ(綾)10の文章に三つの「トツキ」の意味の(1)ト継ぎ、(2)十月、(3)嫁ぎを代入して、下記のように読んで見ました。

この結果より、(1)ト継ぎと(2)十月では、雌の鶺鴒の動作の説明と一致しません。残るは、(3)嫁ぎですが、雌の鶺鴒とどのように関係するのだろうかと考えました。すると、トツキ→嫁ぎ→嫁ぎを説明するために、イサナミ、イサナギなど人間で「嫁ぎ」を説明すると卑猥になる。そのため、鳥のセキレイ(鶺鴒)を用いて、比喻(注3)で「嫁ぎ」を「出会い→見初め→恋愛→ミノマクバヒ(性交)→結婚の報告」までを「嫁ぎ法(しきたり)」として説明していることがわかりました。

(注3)比喻(ひゆ)

ある物事を、類似または関係する他の物事を借りて表現すること。たとえ。

(1)トツキ→「ト継ぎ」を代入して読む トツキ=ト継ぎ=判定「✖」

3アヤ(綾)10

トツキトハ	メノニハナブリ	トツキ(ト継ぎ)とは	雌の鶺鴒
オユレナク	オトリナキサル	尾揺れ鳴く	雄鳥鳴き去る
マタアルヒ	オトリヨソオフ	又ある日	雄鳥装ふ
メガシリテ	アヒマシハレハ	雌が知りて	相交はれは
アメヨリゾ	トリニツケシム	天よりぞ	鳥に告げしむ
トツキノリ		嫁ぎ法	

(1)トツキ→「十月」を代入して読む

トツキ=十月=判定「✖」

3アヤ(綾)10

トツキトハ メノニハナブリ
オユレナク オトリナキサル
マタアルヒ オトリヨソオフ
メガシリテ アヒマシハレハ
アメヨリゾ トリニツケシム
トツキノリ

トツキ(十月)とは 雌の鶺鴒
尾揺れ鳴く 雄鳥鳴き去る
又ある日 雄鳥装ふ
雌が知りて 相交はれは
天よりぞ 鳥に告げしむ
嫁き法

(2)トツキ→「嫁ぎ」を代入して読む

トツキ=嫁ぎ=判定「○」

3アヤ(綾)10

トツキトハ メノニハナブリ
オユレナク オトリナキサル
マタアルヒ オトリヨソオフ
メガシリテ アヒマシハレハ
アメヨリゾ トリニツケシム
トツキノリ

トツキ(嫁ぎ)とは 雌の鶺鴒
尾揺れ鳴く 雄鳥鳴き去る
又ある日 雄鳥装ふ
雌が知りて 相交はれは
天よりぞ 鳥に告げしむ
嫁き法

4)「トツキ(嫁ぎ)」の語源を考える

「トツキ」には、「ト継ぎ」、「十月」、「嫁ぎ」の三種類があると説明してきました。この三つの「トツキ」が古い順に並べ変えて見ます。その順番は、ホツマツタエのヲシテの例を見ますと、清音、濁音の順に言葉が成り立っていることからわかってきます。このことから、「トツキ」は「十月」が先で、「嫁ぎ」と「ト継ぎ」は同順になろうかと思えます。この「トツキ」の順番がわかって来ますと、トツキの語源を考えるチャンスが芽生えて来ます。現在語では、「トツキ」と云えば、「嫁ぎ」を思い浮かべます。そして、「トツキ」の「十月」は何時しか(多分、漢語の渡来後と思われる)忘れられ、「ジュウガツ」と呼ばれております。また、トの国を継ぐ「ト継ぐ」は、トの国の消滅と同時になくなった(ホツマの消滅後)と思えてきます。そして、残った「トツキ」は、他家に嫁ぐの「嫁ぎ」のみになったと思われれます。

そこで遡ってトツキの語源を考えますと、「トツキ」は、ヲシテでは「十月」のことを云っており、この十月、十ヶ月は、子供を妊む期間の「十月十日」の「十月」より来ていると思われるようです。そして本来の嫁ぎとは、「十ヶ月間、お腹に子供を妊むこと」を語源にしていたと思われれます。そして、トツキ(十月→嫁ぎ)に変化した時期をホツマツタエより推定しますと、クニトコタチ、クニサツチ、トヨクンヌの御世の頃は、十ヶ月間の子供を宿すことを「十月(トツキ)」と云っていたと推定されます。そして、次のウビチニ、スピチニの御世になり、「この時に 皆妻入れて(2アヤ(綾)14)」の記述からも推定できるように、「トツキ(十月)」が、「トツキ(嫁ぎ)」の意味に変化して行ったと思われ、また、その後の漢字の渡来後により「嫁ぎ」の字を当て嵌めて、「トツキ」は「嫁ぎ」を指す言葉に定着したことが容易に推定されます。

解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

このようなある状(前述した内容:イサナギ、イサナミが正式に結婚され御子を妊まれたが、早産され、ヒヨル子が生まれ、その子は葦舟で流したこと。)を天に告ぐられるイサナギの心配を慈しまれたトヨケ神は、歴代の神より伝わるフトマニお占い味はえながら曰く(仰られました)。フトマニの占い結果は、1行～5行の構成になっていますが、その中の(注4)2行、4行の文字数は5音、4音で詠まれております。この5音、4音の配列は五四の歌(注4)と云われますが、「立つ柱の運(メグ)り」行事では、「御子を妊めど臨月まで満てす」に事お結ばず(なかった。)(注5)と不吉な歌となっております。その歌の不吉な予兆は、御子を生まんとする言挙げ(言葉に出して言い立てること)の行動にもあらわれており、今後は反省を籠められて、女である私(イサナギ)は「立つ柱の運(メグ)り」行事を先に行うことを謹むことになるでしょうと先に立てず(立たれませんでした。)

そう云えば、鳥のセキレイ(鶺鴒)の嫁ぎ法を見れば、嫁ぎとしては、先に雌の鶺鴒がしきりに尾揺れさせ鳴く(きます。)

だが、その時には雄鳥は、その気がなく、あまり遠くない場所で鳴き去るのみでした。そんな雄鳥も、又ある日からは、雄鳥も我先にと雌鳥への気持ちを装ふ(高ぶらせます)。その雄鳥の気持ちを雌が知り得て、雄鳥と雌鳥が相交はれば、このことを天(の原)よりの報告ぞとして イサナギ、イサナミの結婚を機に鳥に置き換えて民に告げしむ(告げられました)。この時の嫁ぎ法が先例になり、男神、女神が立つ柱を巡られるアマカミ(天神)の嫁ぎ法(しきたり)になったようです。

(注4)2行、4行の文字数は5音、4音で詠まれる

フトマニ 下記は、(例)128通り中の1通りを示す。

行	フトマニ(カナ文字)	文字訳	音	音	音
1	アヤマ	天山	3		
2	アノヤマノ ナカウツ	天の山の 中ウツ	5	4	
3	ロキガ アワノスナ コホ	ロキガ アワのスナ 九星	3	5	2
4	シノエナノ ムネゾア	シの胞衣の 宗ぞ編	5	4	
5	ミケル	みける	3		

(注5)五四の歌 事お結ばず

須田本では、3アヤ(綾)6～8アヤ(文)の『女は「あなにえや(五音) 糸男子(四音)」と 男は「わな嬉し(五音)糸乙女(四音)」の歌のように詠む数が、五音、四音に止む故、『歌ひ妊めど 月満てす』として、「未だ事を結ぶことができない」と解釈している。

3アヤ(綾)11(2行)~13(1行) 【本文】

ヲシテ	カナ文字	現在訳
㊦ ㊧ 舟 ㊨ ㊩ 舟 兼	サラニカエリテ	更に帰りて
㊪ ㊫ ㊬ ㊭ ㊮	フタカミハ アラタニメグリ	両神は 新たに巡り
㊯ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽	オハヒタリ メワミギメクリ	男は左 女は右巡り
㊾ ㊿ ㊻ ㊼ ㊽	アヒウタフ アメノアウウタ	相歌ふ 天の天地歌
㊿ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾	アナニエヤ ウマシオトメニ	あなにゑや 美し乙女に
㊿ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾	アイヌトキ メカミコタエテ	逢いぬ時 女神答えて
㊿ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾	ワナニヤシ ウマシオトコニ	わなにやし 美し男に
㊿ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾	アヒキトゾ	逢ひきとぞ

語句の解説

- ・更に→重ねて。加えて。その上に、・帰り→帰ること。出発点の方へ戻ること。その時や、その道筋。
- ・両神→イサナギ、イサナミ、・あなにゑや→まあ、すばらしい、・美し乙女→容姿の美しい少女。
- ・逢い→逢うこと、・ぬ→動作・作用が完了すること、・わな→念を押す気持ちを強く言い表す。
- ・やし→語勢を強め、感動の意を表す。→よし、・美し男→容姿の美しい男、・逢ひ→あうこと。
- ・きと→決意・意志などがはっきりしているさま。必ず。きっと。

原文の現在訳

更に帰りて 両神は 新たに巡り 男は左 女は右巡り 相歌ふ 天の天地歌 あなにゑや 美し乙女に 逢いぬ時 女神答えて わなにやし 美し男に 逢ひきとぞ

解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

更に(その上に)嫁ぎ法に立ち帰りて 立つ柱の行事を再び行うことをイサナギ、イサナミは決意されました。このことにより、イサナギ、イサナミの両神は新たに立ち柱を巡り、君お生まんとして日の神お生まんと男(イサナギ)は立つ柱の左より、女(イサナミ)は立つ柱の右より巡りなされて、イサナギ、イサナミの両神とも相歌ふ(われました。)そして、両神が歌われたその歌は、言葉を直す天の天地歌でした。

「その男神(イサナギ)の歓喜の声は、あなにゑや (まあ、すばらしい)、美し乙女(容姿の美しい少女)に逢いぬ(逢われた)時、女神(イサナミ)は男神(イサナギ)の発声に 答えて わなにやし(強く感動の意を表すこと)美し(容姿の美しい)男に逢ひきと(逢うべき)ぞと言葉を返されました。」

3アヤ(綾)13(1行)~16(1行) 【本文】

ヲシテ	カナ文字	現在訳
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	ヤワシテアワオ	和して天地お
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	エナトシテ ヤマトアキツス	胞衣として ヤマト秋津洲
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	アハチシマ イヨアハフタナ	淡路島 伊予阿波二名
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	オキミツコ ツクシキヒノコ	隠岐三つ子 筑紫吉備の子
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	サドウシマ ウミテウミカハ	佐渡大州 生みて海川
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	ヤマノサチ キオヤククノチ	山の幸 木祖ククノチ
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	カヤノヒメ ノツチモナリテ	カヤノ姫 ノツチも成りて
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	アウウタニ ヲサムハラミノ	天地歌に 治むハラミの
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	ミヤニキテ ステニヤシマノ	宮にゐて すでに八州の
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	クニウミテ イカンソキミオ	国生みて いかんそ君お
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	ウマントテ ヒノカミオウム	生まんとて 日の神お生む
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	ソノミナオ ウホヒルギトゾ	その御名お ウホヒルギとぞ
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	タタエマス	称えます

語句の解説

- ・やわす→静まらせる。やわらげる。平定。服従させる、・胞衣→胎児を包んでいた膜や胎盤など。
- ・秋津洲→古くは「あきづしま」、大和国の異称、・ウシマ→ウ(大きい)シマ(大島)、
- ・山の幸→山でとれる獲物や山菜など、・ククノチ→木の神、・カヤノ姫→草の祖・草野姫
- ・ノツチ→野の霊、野の神、・八州→日本の古称。おおやしま、・いかん→できない。いかない。
- ・いかんぞ→いかにぞの転語、・いかにぞ→どんなふう。どのように、・日の神→ウホヒルギのこと
- ・ウホヒルギ→ワカヒトのこと

原文の現在訳

和して天地お 胞衣として ヤマト秋津洲 淡路島 伊予阿波二名 隠岐三つ子 筑紫吉備の子 佐渡大州 生みて海川 山の幸 木祖ククノチ カヤノ姫 ノツチも成りて 天地歌に 治むハラミの 宮にゐて すでに八州の 国生みて いかんそ君お 生まんとて 日の神お生む その御名お ウホヒルギとぞ 称えます

【疑問】

「ヤワ(和)して天地お 胞衣として ヤマト秋津洲 ..(中略)..佐渡大州 生みて海川」の「生みて」とは、どのような意味があるでしょうか。

【疑問に答える】

(1)生みて

この「ウミテウミカハ(生みて海川)」から連想しますと、生まれるの「生み」と訳しがちです。だが、この文頭には、「ヤワシテアワオ(和して天地お) エナトシテ(胞衣として)」と記述されており、この文章は日本列島の創世記のことを表現していると察せられ、ヤマト秋津洲・・(中略)・・佐渡大州を人間で云えば、子供と仮定し、地球が母に見立てており、この地球の空と大地(天地)が洲(島)の胞衣となると表現した文章に察せられます。このように日本列島の島の生い立ちを説明する場合に、人間の子供が生まれるプロセスで説明することで、日本列島は天御祖神の心(オノコロ)の島であること強く意識されて天地の歌に読み込まれたと思われれます。さらに、トミ(臣)、タミ(民)に広く触れる必要から、天地の歌に残されたと察せられます。このようにして、ホツマツタエの文章には、時々、仮定法で記述されていることを理解しなければなりません。そして、これが「ウミテウミカハ(生みて海川)」の「生みて」と表現している本質だと思います。

それに対し、日本書紀ではその仮定法と察することができず、「両神(イサナギ、イサナミ)」が「ヤマト秋津洲・・(中略)・・佐渡大州(を) 生みて」と、早合点していると思われれます。その文章での特出な点を抽出しますと、「遯合為夫婦。及至産時。(訳文:遯合して夫婦と為りたまひき。産む時に至及びて)」と記述しており、イサナギ、イサナミの夫婦が、州(島)を産むだと誤認される記述になっておりました。では、なぜ、誤認されている文章になったかと云えば、その原点は「遯合(コウゴウ)」の言葉にあるようです。

「遯合(コウゴウ)」は、ホツマツタエでは、「ミ トノマクバヒ」と記述されております。その「ミ トノマクバヒ」が記述されている文章をホツマツタエの3アヤ(綾)3(2行)~4(1行)の解説文より引用しますと、「そして両神はお互いの秘密を確認されるやお互いの体を合せて御子お生まん(生もう)とて(とて)性交、媾合の古語であるミ トノマクバヒを為(されま)して、イザナミの女神は(皇)子お妊みて、268日目頃に皇女をお生みにめる(なりました。)お生まれになったその皇女の名はヒルコと申されました。」と掲載しております。あくまでも、「遯合(コウゴウ)」、「ミ トノマクバヒ」の言葉は、ヒルコ姫が生まれた時の言葉であり、州(島)が生まれにかかる言葉でないことです。

そのホツマツタエの文章を無視して勝手な文章の抜粋により、延いては、イサナギ、イサナミの夫婦が、州(島)を産むだと誤認される「遯合為夫婦。及至産時。(訳文:遯合して夫婦と為りたまひき。産む時に至及びて)」の文章を日本書紀は記述に残しておりました。そのため、「理論上、ありえない」、「人は島を作れない」ことを、滑稽ながらもイサナギ、イサナミが「国を生んだ」と早合点し、現在まで語り継がれる一因になっていたようです。

漢文(抜粋箇所)

於是陰陽始遯合為夫婦。及至産時。先以淡路洲為胞。意所不快。故名之曰淡路洲。廼生大日本(日本。此云耶麻騰。下皆效此。)豊秋津洲。

訳文

ここに陰陽始めて違合して夫婦と為りたまひき。産む時に至及びて、まず淡路の洲を胞為ししも、意快からざりしかば、故、名けて淡路の洲と曰ふ。すなわち大日本豊秋津洲を生む。

日本書紀(原文の抜粋)

《第四段本文》…(前略)…於是二神却更相遇。是行也陽神先唱曰。意哉。遇可美少女。焉(少女。此云烏等=[口+羊])。因問陰神曰。汝身有何成耶。対曰。吾身有一雌元之処。陽神曰。吾身亦有雄元之処。思欲以吾身元処、合汝身之元処。於是陰陽始違合為夫婦。

及至産時。先以淡路洲為胞。意所不快。故名之曰淡路洲。廼生大日本(日本。此云耶麻騰。下皆效此。)豊秋津洲。次生伊予二名洲。次生筑紫洲。次双生億岐洲与佐度洲。世人或有双生者、象此也。次生越洲。次生大洲。次生吉備子洲。由是始起大八洲国之号焉。即対馬嶋。壹岐嶋。及処処小嶋。皆是潮沫凝成者矣。亦曰水沫凝而成也。

日本書紀の訳文(武田祐吉校注を引用)

《第四段本文》…(前略)…ここに二の神却りてまた相遇(あ)ひたまふ。この行(たび)は、陽神まづ唱へてのりたまはく、「あなにゑや可美少女に遇ひつ」とのりたまひ、因りて陰神に問ひてのりたまはく、「汝が身に何の成れるところかある。」とのりたまへば、対へてのりたまはく、「吾が身に雌の元の処一つあり」とのりたまふ。陽神のりたまはく、「吾が身にも雄の元の処あり。吾が身の元の処を汝が身の元の処に合はせむ」とのりたまひて、ここに陰陽始めて違合して夫婦と為りたまひき。

産む時に至及びて、まず淡路の洲を胞為ししも、意快からざりしかば、故、名けて淡路の洲と曰ふ。すなわち大日本豊秋津洲を生む。次に伊予の二名の洲を生む。次に筑紫の洲を生む。次に億岐の洲と佐度の洲とを双子に生む。世の人双生むことあるはこれに象(かたど)れるなり。次に越の洲を生む。次に大洲を生む。次に生吉備の子洲を生む。これに由りて始めて大八洲国の号(な)起れり。対馬嶋。壹岐嶋。また処々の小嶋は、皆潮沫(しほなわ)の凝りて成れるものなり。亦は曰はく、水の沫の凝りて成れるともいふ。

解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

イサナギ、イサナミは、次に生まれる子には「日の神お生まん」と待望されて、「鳥のセキレイ(鶺鴒)より嫁ぎ法」を取得されました。また、新たな気持ちで「立つ柱」を巡られながら、「あなにゑや」より始まる天の天地歌を歌われたのでした。

そして、皇子が生まれるまでの間にイサナギ、イサナミは、日本列島の創世記から始まる日本の歴史を天地の歌にされました。天地は当時の昔話を引用して、混沌の中より和して(静まり)日本列島が造られました。その島ができる経緯は、母より子供が生まれる情景に準えられる仮定法に置き換えて、天地の歌が詠まれたのでした。

天地の歌

「天地お母の胞衣と見なすこととして、また、子供と見なしたヤマト秋津洲、淡路島、伊予阿波二名、隠岐三つ子、筑紫吉備の子、佐渡大州を生みて、またその島の周りには豊かな海川があり、山では山の幸(山でとれる獲物や山菜など)が採れ、自然界には木祖ククノチ(木の神)、カヤノ姫(草の祖・草野姫)、ノツチ(野の霊、野の神)も成りて(揃いました)」

この天地歌に詠まれた島々は、天御祖神の心(オノコロ)の島と云われ、待望の日の神が生まれられれば、治むる島になります。イサナギ、イサナミはハラミの宮にゐて(滞在され)日の神の誕生を待望されました。両神が御心は、すでに八州(注6)の国も生みて揃っている。あとは、いかんそ(どんなふう)に君お 生まんとて(と云って) 日の神お生む その日の神の御名お ウホヒルギとぞ(注7) 称え(られ)ます(した)

(注6)八州とは、

ヤマト秋津洲、淡路島、伊予阿波二名、隠岐三つ子、筑紫、吉備の子、佐渡、大州と推定されます。

(注7)五六の歌 事お結んだ

須田本では、3アヤ(綾)12~15では、『「あなにゑや(五) 美し乙女(六)に 逢いぬ時」 女神答えて「わなにやし(五) 美し男子(六)に 逢ひきとぞ」の歌のように詠む数が、五六で、「和して天地お 胞衣として ..日の神お生む』のようにウホヒルギ(ワカヒト)が生まれて「事を結んだこと」を記述している。

3アヤ(綾)16(1行)~18(3行) 【本文】

ラシテ	カナ文字	現在訳
△舟△△①开△	クニウルハシク	国麗しく
策舟単四△	テリトホル	照り徹る
単単①△△	クシヒルノコハ	奇日霊の子は
◎①△舟△△	アメニオクリテ	留めずと
◎①△舟△△	トメズト	天に送りに
◎①△舟△△	アメノギト	天のギと
◎①△舟△△	ミハシラノミチ	御柱の道
△策母△△	タテマツル	奉る
△策母△△	カレニハラミオ	故にハラミお
△△風母母	オオヒヤマ	大日山
△△風母母	トヨケカガエテ	トヨケ考ゑて
△①風母母	ワカヒト	ワカヒトと
△①風母母	イミナオササグ	イミナお捧ぐ
△①風母母	フタカミハ	両神は
△①風母母	ツクシニユキテ	筑紫に行きて
△△舟△△	ウムミコオ	生む御子お
△△舟△△	ツキヨミノカミ	月読の神
風舟△△	ヒニツゲト	日に次げと
◎①△舟◎①△	アメニアゲニス	天に上げます

語句の解説

- ・奇日霊→神秘的な力を持つ意、・天に送りて→天の原に送り政務に着かせる
- ・「ギ」→男の天神(アマカミ)、・ハラミ→富士山の古名、・トヨケ→タマキネのこと
- ・ワカヒト→ウヒルギのこと、・筑紫→古く九州地方の称、・月読神→モチキネのこと
- ・次げと→次ぐ、次の、準ずる

原文の現在訳

国麗しく 照り徹る 奇日霊の子は 留めずと 天に送りて 天のギと 御柱の道 奉る 故にハラミお
オ大日山 トヨケ考ゑて ワカヒトと イミナお捧ぐ 両神は 筑紫に行きて 生む御子お 月読の神 日
に次げと 天に上げます

解説文 (赤字は、原文の現在訳です。)

八州の国も相揃い、イサナギ、イサナミの御世が日本列島に行き渡る頃、日の神のウホヒルギが生まれられました。そのアマカミ(天神)の子の誕生は、**国中も麗しく照り徹る**ほどになり、イサナギの威光は津々浦々まで行き渡るようになりました。そして、学業を受けられる年頃になると、**クシヒル**(奇日霊：神秘的な力を持つ意)**の子であるウホヒルギは** ハラミの宮に**留めずと** 当時の**天の原**であった日高見に**送りて** **天**を治めるアマカミ(天神)**のギ(男神)として、** **御柱**(天御祖神を祭る柱)**の道**を執り行うようにと、日高見に**奉る**ことになりました。

故に日の神、ウホヒルギが生まれられた山の**ハラミ**(現在の富士山)**お、**永く後世に伝える名として、**大日山**と称えられるのでした。また、**トヨケ**神は、ウホヒルギのイミナを深く**考ゑて** **ワカヒトと イミナ**お名付けられ**捧ぐ**ことになりました。後に、イサナギ、イサナミの**両神は** **筑紫**に行きて **オトタチハナの**アワキ宮にて、モチキネを**生む**ことになりました。そして、その**御子**の名であるイミナ・モチキネ**お** **月読の神**と称え、**日の神**のワカヒトに**次げと** **日高見**の**天の原**(政務所)に**上げます**(られました。)

5アヤ(綾)5(2行)~6(4行)より引用すると、

	筑紫に御幸
橘お	植ゑて常世の
道成れば	諸神受けて
タミ(民)お治す	魂の緒留む
宮の名も	オトタチハナの
アワキ宮	皇子生まれませば
モチキネと	名付けて至る

3アヤ(綾)18(4行)~19(3行) 【本文】

ヲシテ	カナ文字	現在訳		
田夷田田ホ	コレノサキ	オエクマニスツ	これの前	穢隈に捨つ
爪爪田爪	ヒルコヒメ	イマイツクシニ	ヒルコ姫	今慈しに
甲甲凡甲	タリイタリ	アメノイロト	足り至り	天の妹と
夕①凡爪	ワカヒルメ		ワカヒルメ	

語句の解説

- ・隈→奥まった所、・ヒルコ→イサナギの初子、・天の妹→一度捨てた妹の名、
- ・ワカヒルメ→拾われた妹の名

原文の現在訳

これの前 穢隈に捨つ ヒルコ姫 今慈しに 足り至り 天の妹と ワカヒルメ

解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

これ(ワカヒト、モチキネが生まれる)の前の出来事です。長女のヒルコ姫が生まれる年には運悪く、両親のイサナギ、イサナミが天の節に当たっておられました。「然れと父は スズ四十穂 母は三十一穂 天の節 宿れは当たる 父の汚穢 (3アヤ(綾)4(1行)~6(2行))」そのため、汚穢の禍を避けるために、地形が隈(奥まった所)の河川の流れに、ヒルコ姫を乗せた磐楠船を捨つ(捨てられました。)そして、カナサキに拾われたヒルコ姫は幼少の頃より聡く、養父のカナサキより色々な知識を取得され、また、和歌に秀でて「下照姫」の称え名を頂くまでになってきました。そして、ワカヒト、モチキネが天の原に送られる頃になりますと、ヒルコ姫の禍も一新されており、また、遠くからヒルコ姫を眺めてこられたイサナギ、イサナミの両神は、ヒルコ姫を今にも慈しまれて、更に日足り至りた後に、成長したヒルコ姫を天(ワカヒト、アマテル神)の妹として、ワカヒルメの称え名を贈り、再び天の原に迎ひ入れられました。

3アヤ(綾)4(1行)~6(2行)より引用すると、

	然れと父は
スズ四十穂	母は三十一穂
天の節	宿れは当たる
父の汚穢	男の子は母の
隈となる	三歳慈しに
足らざれど	磐楠船に
乗せ捨つる	

3アヤ(綾)19(3行)~21(1行) 【本文】

ラシテ	カナ文字	現在訳
☆㊦△舟舟△☆	スサクニニウム	スサ国に生む
☆㊦田☆の 卒来舟日㊦来㊦	スサノオハ ツネニオダケビ	スサノオは 常に雄叫び
田ホ凡㊦㊦	△舟㊦㊦△舟△ ナキイザチ	泣きいざち 国民挫く
凡㊦田㊦の	由田△㊦田☆㊦ イサナミハ	ヨノクマナスモ イサナミは 世の隈なすも
夕㊦㊦㊦	㊦㊦田㊦㊦△㊦ ワガオエト	タミノオエクマ わが汚穢と 民の汚穢隈
㊦舟△来来	㊦㊦㊦㊦㊦㊦ ミニウケテ	マモランタメノ 身に受けて 守らんための
△㊦田㊦㊦	クマノミヤ	隈の宮

語句の解説

- スサ国→紀国、和歌山県、-スサノオ→(正)ソサノオ、-いさちる→涙を流してはげしく泣く。
- 挫く→捻挫(ねんざ)する。

原文の現在訳

スサ国に生む スサノオは 常に雄叫び 泣きいざち 国民挫く イサナミは 世の隈なすも わが汚穢と 民の汚穢隈 身に受けて 守らんための 隈の宮

【疑問】

スサノオは、「常に雄叫び」「泣きいざち」することで 国民挫くと記述されております。このことに対し、母のイサナミは、「世の隈なすも わが汚穢と 民の汚穢隈 身に受けて 守らんための 隈の宮」と言い訳しております。このように、イサナギが言い訳しなくてはならないような「罪」は、どんなことだったでしょうか？

【疑問に答える】

アマカミ(天神)の御世の頃には、すでに良い子が生まれる条件が、すでに確立していたとホツマツタエが記述しているようです。その良い子が生まれる条件を、7アヤ(綾)56(4行)~60(4行)を引用しますと、「浮橋お得て 嫁ぐべし 女はツキシホ(月経)の 後三日に 清く朝日お 拝み受け」と記述しており、その「三日後に」妊む子は「良き子生むなり」だったようです。それに対し、イザナミがソサノオを妊娠した時の条件は、「過りて 穢るる時に 妊む子は」と記述している所から、良い子が生まれる条件でなかったことを意味しているようです。

この「過りて」を言い換えますと、「過失ありて」とも訳ができるかと思えます。そうすると、どんな過失だったかですが気になりますが、推測しますと、この場合は「後三日に 清く」に疑問が湧きます。そこで、女性の平均的な生理の期間についてインターネット情報より取得しますと、「期間は 3~7 日程度」が正常とされるようです。そうしますと、「期間は3~7日程度」の「後三日に 清く」の文章が続くことに

なり、「三日後に」妊む子は「良き子生むなり」だったと解釈できるようです。

それに対し、「過りて 穢るる時に 妊む子は 必ず荒るる」と記述しているところから、「過りて 穢るる時に」の解釈は、平均的な生理期間の3～7日間の内に妊娠したことを意味しているのか否かであろうかと思えます。そして、この生理期間中に異常な妊娠したため、ソサノオは「常に雄叫び」「泣きいざち」ようになったのだろうかとの推測が成り立ちます。このことは、イサナミが、「世の隈なすも わが汚穢と 民の汚穢隈 身に受けて 守らんための 隈の宮」と言い訳しているところから、「穢るる時(生理期間は、3～7日と長い)に」、希に妊娠したことを察している言い訳しているとも受け取られます。

7アヤ(綾)56(4行)～60(4行)より引用すると、

	昔、両神
遺し文	天の巡りの
ムシバミ(日蝕)お	見るマサカニの
中凝りて	生むソサノオは
魂乱れ	国の隈なす
過ちそ	男は父に得て
ハ(地)お抱け	女は母に得て
天と中寝よ	浮橋お得て
嫁ぐべし	女はツキシホ(月経)の
後三日に	清く朝日お
拝み受け	良き子生むなり
過りて	穢るる時に
妊む子は	必ず荒るる
前後	乱れ流る
わが恥お	後の掟お
占形ぞ	必ずこれお
な忘れそこれ	

解説文 (赤字は、原文の現在訳です。)

イサナギ、イサナミには、「一姫三男」の子供が生まれ、末っ子には「ソサノオ」がいます。その末っ子のソサノオが生まれた国は、ワカ姫の1アヤ(綾)24、25より引用しますと、「紀志井こそ 妻お身際に 琴の音の 床に吾君お 待つぞ恋しき」と歌われている「紀志井国」になります。その紀志井国の現在の県名は、和歌山県です。なお、スサ国の由来ですが、紀志井国で生まれたソサノオは、幼少の頃、性格が荒んでいた。このため、当3アヤ(綾)では、紀志井国をソサノオの性格に因みスサ国と表現したと思われます。

イサナギ、イサナミの両親は、スサ(紀志井)国においてハナキネのソサノオを生む(みました)。だが、幼少のソサノオは、常に雄叫びまた、ある時は泣きいざちるなどの奇行を重ねるため、国民の信頼を得ることができなく、挫く日々が続きました。そんなソサノオを慈しんだイサナミは、「スサノオが、常に雄叫び、泣きいざちるなど世の隈なす奇行も、わが(イサナミ)ツキシホ(月経)にて穢るる時(生理期間は、3～7日と長いため)の汚穢が原因と思うようになりました。そして、この原因のことを知ったイサナミは、民の口悪く罵る汚穢の禍を避けるために、紀志井国の隈(奥まった所)にソサノオを隠し、ソサノオの身に降りかかる罵詈雑言を最小限に受け入れさせておりました。だが、ソサノオにかかる汚穢は続くため、見兼ねたイサナギ、イサナミは、ソサノオを守らんために、ソサノオが隠れた隈の地名を熊野に改名し、隈(熊)の宮を建ててソサノオを癒されました。

3アヤ(綾)21(1行)～22(4行) 【本文】

ヲシテ	カナ文字	現在訳
① 𐀀 𐀁 𐀂 𐀃 𐀄 𐀅	カクミココロオ	かく御心お
𐀆 𐀇 𐀈 𐀉 𐀊 𐀋 𐀌 𐀍 𐀎 𐀏 𐀐 𐀑	ツクシウム ヒヒメオカミ	尽くし生む 一姫三男神
𐀒 𐀓 𐀔 𐀕 𐀖 𐀗 𐀘 𐀙 𐀚 𐀛 𐀜 𐀝	ウミテヨノ キミミノミチ	生みて世の 君臣の道
𐀞 𐀟 𐀠 𐀡 𐀢 𐀣 𐀤 𐀥 𐀦 𐀧 𐀨 𐀩 𐀪 𐀫 𐀬 𐀭 𐀮 𐀯 𐀰 𐀱 𐀲 𐀳 𐀴 𐀵 𐀶 𐀷 𐀸 𐀹 𐀺 𐀻 𐀼 𐀽 𐀾 𐀿	トノヲシエ サカリモトラハ	「ト」の教え 逆り悖らば
𐀿 𐁀 𐁁 𐁂 𐁃 𐁄 𐁅 𐁆 𐁇 𐁈 𐁉 𐁊 𐁋 𐁌 𐁍 𐁎 𐁏 𐁐 𐁑 𐁒 𐁓 𐁔 𐁕 𐁖 𐁗 𐁘 𐁙 𐁚 𐁛 𐁜 𐁝 𐁞 𐁟 𐁠 𐁡 𐁢 𐁣 𐁤 𐁥 𐁦 𐁧 𐁨 𐁩 𐁪 𐁫 𐁬 𐁭 𐁮 𐁯 𐁰 𐁱 𐁲 𐁳 𐁴 𐁵 𐁶 𐁷 𐁸 𐁹 𐁺 𐁻 𐁼 𐁽 𐁾 𐁿	ホコロパス コノフタハシラ	減ばす この二柱
𐁿 𐂀 𐂁 𐂂 𐂃 𐂄 𐂅 𐂆 𐂇 𐂈 𐂉 𐂊 𐂋 𐂌 𐂍 𐂎 𐂏 𐂐 𐂑 𐂒 𐂓 𐂔 𐂕 𐂖 𐂗 𐂘 𐂙 𐂚 𐂛 𐂜 𐂝 𐂞 𐂟 𐂠 𐂡 𐂢 𐂣 𐂤 𐂥 𐂦 𐂧 𐂨 𐂩 𐂪 𐂫 𐂬 𐂭 𐂮 𐂯 𐂰 𐂱 𐂲 𐂳 𐂴 𐂵 𐂶 𐂷 𐂸 𐂹 𐂺 𐂻 𐂼 𐂽 𐂾 𐂿	ウムトノハ アマノハラミト	産む殿は 天のハラミと
𐂿 𐃀 𐃁 𐃂 𐃃 𐃄 𐃅 𐃆 𐃇 𐃈 𐃉 𐃊 𐃋 𐃌 𐃍 𐃎 𐃏 𐃐 𐃑 𐃒 𐃓 𐃔 𐃕 𐃖 𐃗 𐃘 𐃙 𐃚 𐃛 𐃜 𐃝 𐃞 𐃟 𐃠 𐃡 𐃢 𐃣 𐃤 𐃥 𐃦 𐃧 𐃨 𐃩 𐃪 𐃫 𐃬 𐃭 𐃮 𐃯 𐃰 𐃱 𐃲 𐃳 𐃴 𐃵 𐃶 𐃷 𐃸 𐃹 𐃺 𐃻 𐃼 𐃽 𐃾 𐃿	ツクバヤマ アハチツキシミ	筑波山 淡路月隅
𐄀 𐄁 𐄂 𐄃 𐄄 𐄅 𐄆 𐄇 𐄈 𐄉 𐄊 𐄋 𐄌 𐄍 𐄎 𐄏 𐄐 𐄑 𐄒 𐄓 𐄔 𐄕 𐄖 𐄗 𐄘 𐄙 𐄚 𐄛 𐄜 𐄝 𐄞 𐄟 𐄠 𐄡 𐄢 𐄣 𐄤 𐄥 𐄦 𐄧 𐄨 𐄩 𐄪 𐄫 𐄬 𐄭 𐄮 𐄯 𐄰 𐄱 𐄲 𐄳 𐄴 𐄵 𐄶 𐄷 𐄸 𐄹 𐄺 𐄻 𐄼 𐄽 𐄾 𐄿	クマノナリケリ	熊野なりけり

語句の解説

- ・君臣の道→末永く君臣の主従関係が続く道
- ・トの教え→断片的な記述あり。トは整ふる ヲシテなり(17-11)、トはヲシテ ホコは逆矛(23-9)推測すると、トの国に由来し、末永く治めるために国を整える方法を記述したヲシテ(典)。そのヲシテには、君臣の道(3-21)、イモオセの道(13-46)、嫁ぎ法 子お整ふる、(4-22)、子を養す法(17-32)などが含まれていると推測。
- ・二柱→イサナギ、イサナミ、・ハラミ→ワカヒト生まれる、・筑波山→ヒルコ生まれる、
- ・淡路→ヒヨルコ流産する、・月隅→モチキネ生まれる、・熊野→ハナキネ生まれる

原文の現在訳

かく御心お 尽くし生む 一姫三男神 生みて世の 君臣の道 「ト」の教え 逆り悖らば 減ばす この二柱 産む殿は 天のハラミと 筑波山 淡路月隅 熊野なりけり

解説文 （赤文字は、原文の現在訳です。）

かくして天御祖神の御心お尽くして、イサナミはソサノオを生む(生みました)。これにて、イサナギ、イサナミの両神は、一姫三男神(アマテル神、ワカ姫、月読の神、ソサノオ)の皇子を生みて、世の国民を安らかに治められました。これもそれも、天御祖神より引き継がれて来た君臣の道や国常立、クニサツチの「ト」の国で整えられた「ト」の教えが国民を治める基になっておりました。この「ト」の教えに逆り悖らば(道理に背けば)オノコロ島は必ず滅ばず(滅びます)。このようにして、イサナギ、イサナミの二柱が皇子を儲けられた産む殿は、アマテル神の天のハラミ、ワカ姫の筑波山、ヒヨルコの淡路、月読の神の月隅、ソサノオの熊野になりけり(ます)。このことから皇子の数は4名になり、泡となって流れたヒヨルコの産む殿を含みますと、産む殿は5ヶ所になります。

(3アヤ(綾) おわり)